

解けない問い とともにノを超えて
- 解けない問い学 試論（序論） -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
佐藤 修一

フランスの精神分析医 Lacan, J.は、言葉を話す存在、すなわち「話存在（parlêtre）」という意味でのわれわれ人間存在を「神経症者」と呼んだ。そして、筆者はその卒業論文において、「神経症者」を「解けない問い を生きる主体」として定式化した。

解けない問い とは、「シニフィアンの導入」たるエディプス・コンプレックスにおいて、人間存在と言葉との関係から生じるものであり、その本質は「私とは何か」である。

「話存在」という意味でのわれわれ「神経症者」は、言葉および 解けない問い の「不自由」な「主体=従属者（sujet）」である。言い換えれば、「神経症者」とは、「言葉の奴隷」であり、かつ question-driven な「解けない問い の奴隷」なのである。

精神分析家 Miller, J.-A.は、このように「不自由」な「神経症者」の姿を「眠り」に喩えた。「神経症者」とは「語る」ことで『意味』（=『私』）を作り出し、「意味の幕」に映った「夢」を見ることで「眠って」いる「主体」である。そして精神分析学とは、解けない問い を生きることで「語り」、「眠って」いる「神経症者」が「目覚める」ための営みであり、その本質は 解けない問い学（Major Questiology ; MQ） と呼べる。

本論において筆者は、精神分析学以外の観点も取り入れながら、解けない問い学 を提案することで、解けない問い学的転回 を生じさせ、それを通して、言葉および 解けない問い の奴隷である「神経症者」の「自由」について探求した。それは「眠り」から「目覚め」へ を目指す、「自由」への「道=倫=未知」という名の「旅」である。

筆者は MQ に「3つの軸」と「2つの参照項」を想定する。「3つの軸」とは 「話存在」の発達、 解けない問い の深まり、「時間」のあり方である。「2つの参照項」とは Lacan の精神分析学と、現代のスピリチュアリスト Tolle, E.の「今ここ」の思想である。なお、「MQ 試論」の「序論」である本論においては、 と は扱わない。

筆者は 「『話存在』の発達」における一連の過程、すなわち 「話存在」の発達ラインを想定した。それは「神経症者」の誕生以前の段階（「精神病者」から「倒錯者」へ）から、「神経症者」の段階（「健常者」から「病的神経症者」へ）を経て「超神経症者」へと至る歩みである。われわれはこの 「話存在」の発達ライン を探求の「地図」とした。

「健常者」とは「夢」の中で「安眠」している「主体」である。「病的神経症者」とは「悪夢」にうなされ、「病的痛み」を抱えた、ひどく「不自由」な「主体」である。そして「夢」から「目覚め」、「神経症」を超えた「自由」な存在を「超神経症者」と呼ぶ。

詳細は本文に譲るが、「解けない問い学 試論」の「序論」である本論では、解けない問い学的差異 も加味しながら、「地図」の「中間地点」である「健常者」までを扱った。